



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1987
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

若者たちへ

キリストに向かつて歩みなさい②

みなさんにとっては、「血を流すほどの抵抗」(ヘブライ12・4)をするような機会はありませんが、信仰をわかち合うことができずに、苦しんでいます。信仰を異にする兄弟、不信の兄弟たちの良心を裁くのは、ただ神のみ。神だけが、自由に、自発的に受け入れる人々の頭と心に真実のみのりをもたらすことがおできになります。ですから私たちは、いつも尊敬と忍耐と愛をもって行動しましょう。なお、すべての人が余すところなく神を知るに至るよう、全力を尽くして願います。神のこの賜が、人々の偏見のない心と出会うよう祈ります。そのために私たちは働かなければなりません。受けた信仰の忠実な証人として、すみずみまで気を配った対話、心の琴線にふれる言葉を用いて、信仰をあかししましょう。人々の中に働く聖霊の御力に信頼してください。キリストもみなさんに

仰せになっています。「あなたたちが私の証人としよう」と。みなさんが証人とならなければ、みなさんの家庭で、学校で、自由時間とともに過ごす級友たちや仕事仲間たちの間で、いったい誰があかしを立てましょう。

かし、証人となるためには、確たる信仰を身につけなければなりません。時には疑うこともあ

るでしょう。科学のさまざまな発見、テクノロジの種々の可能性に目くらんで、信仰のもつ神秘的な効果が見えなくなることもあります。こうした問題と、取り組まなければならぬ。神は科学によって測つた観察したりできる対象ではありません。あまたの不可知論者の言う、不可知の存在でもありません。神は全ての存在のみなもと、パスカルの言う、愛の秩序のみなもとのです。みなさんは絶えず、信じる理由を深

めて行かねばなりません。そして何よりも、イエズス・キリストの内に示された神と出会うようにと、みなさんは招かれています。みなさんのカテキジスや集会、生活の糾明、読書、黙想会、祈りの目的は、イエズス・キリストと出会うことなのです。疑いという試練を通してみなさんの信仰は浄化され、使徒ペトロの言葉どおり「あなたたちの内にある希望の理由を尋ねる人に答える」(ペトロ①3・15)準備ができるでしょう。

「信じたところで、何の役に立つだろう」

これが、みなさんの友人の多くを悩ませる最後の質問です。まずお尋ねしたいのですが、「役に立つ」とは、どのような意味ででしょうか。感覚的な幸福を手に入れるのに役立つ何か特別なもの、自らの利益になるようなものとして、あるいは、この世を支配できるようにと神が与えてくださった天性や知性や心を用いた、この世での仕事の成果を保証してくれるものとして、さらには道徳面の成長を仕上げる手段として、直接に神

と宗教を利用してみようというのなら……失望落胆は避け難いことでしょう。神は私たちの欠陥を補うための道具ではありません。神は偉大な御方なのです。神はすべてを超えて、自ら存在する御方です。神は神であるゆえに、見返りなしに知られ、賛美され、仕えられ、愛されるにふさわしい御方です。また私たち自身も、自らについて十分理解するよう神が望まれていることも事実です。

ポティヌスの後継者で、リヨンの二代目司教のイレネウスは「神の栄光は生きている人間である」と言いました。私に永遠の生命について話してほしいと言う人が何人もありました。親愛なるみなさん、本当に、神を見たいとお望みですか？ この世で信仰によって神と出会った後、次の世では顔と顔をあわせて出会うたい、と？ 今こそ神の生命に与り神と自分を引き離すものから救われたい、罪を赦してほしいとお思いですか？ そのような恩寵は、みなさん自身の力では手に入りません。神御一人が、みなさんにお与えになれるのです。ここから始めて、神はその他多くのことをしてくださいるでしょう。物事を変えてくださいと神に願えば、もっと良いことに、神はみなさんを変えてくださるでしょう。

神を見つめ、信仰を捧げ、祈り、神を頼りに自分を大きく成長させることによって、神とともに「真実を行なう」ことによって、そして何よりも愛の命令に応じることによって、みなさんは、もはや以前と同じ人ではなくなりません。その意味で、信仰はまさしく非常に有効です。これこ

それが、みなさんの言う「神を生きる」道です。神は、私たちの心を超えて偉大な方なのです。

年 間第27主日にあたる今朝のミサで、「私たちの信仰を増してください」(ルカ17・5)とイエズスに願う使徒についてお聞きになったでしょう。これこそ、私たちが互いに助け合いつつ、主に申し上げなければならぬ祈りです。少しの信仰でもあれば多くのことが可能になる、とイエズスは仰せになりました。

私を迎えてくれたほとんどすべて、私と話をうとして集まってきた若者たちに出会いました。その多くは、みなさんがお尋ねになったような、信仰に関する解答を求めると同時に、人生で成功をおさめると同時に信仰生活においても成功し、世界を新たにしたいと願っています。彼らも、これからみなさんとお話する重大問題に直面していますが、イエズス・キリストに言及するのをためらいはしません。

初 期のリヨンの共同体が主に對して示した、あの最初の愛は再発見できるでしょうか。主を見出した時に感じたはずの、あの最初の情熱は？

こうした情熱のあかしの中に、支持者が見つかるのはうれしいことです。新しい見方をするなら、イエズス・キリストとの出会いによって、この人たちに何がもたらされるかわかるでしょう。しかし、状況が変われば歴史も全く同じようには繰り返しません。感じ方は変わるものですが、それは重要なことではありません。

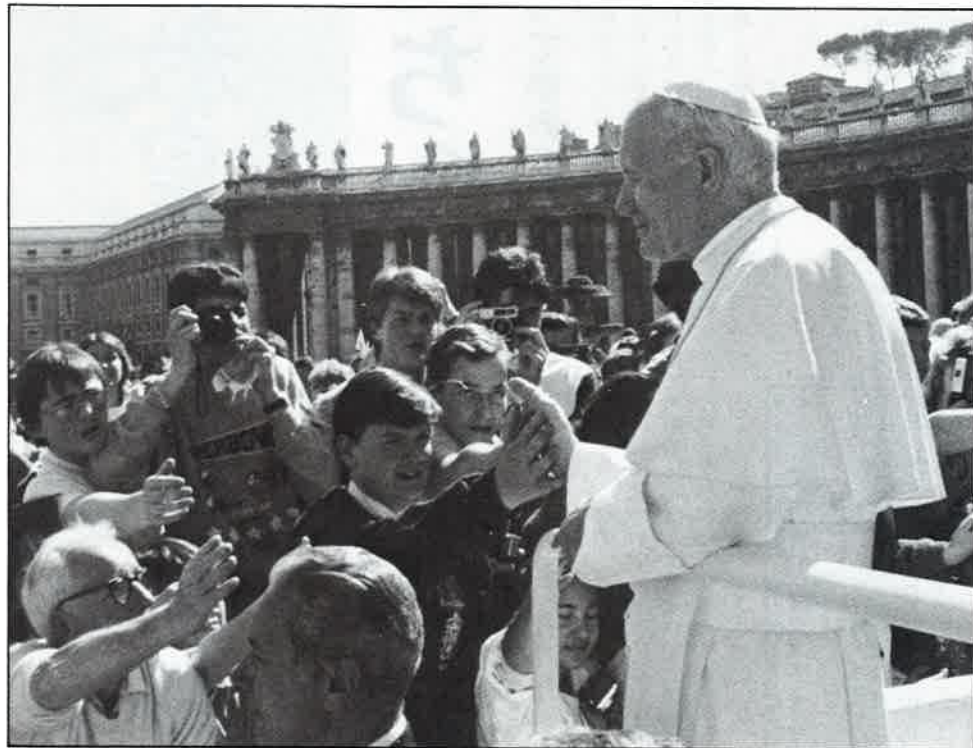
時には夜明け前の暗闇の中を手さぐりで進むこともありませんが、忠実さは変わらず、愛情は確信を得て、しだいに強く育っていきます。過去をなつかしみふり返るよりも、前方を見つめなければなりません。キリストは私たちが新しい一歩をふみ出すよう、呼びかけておられます。聖霊は今も昔と変わらず、各世代の心の中で福音を新たに成長させてくださいます。「起きて、歩きなさい！」

**教会なしに
キリストへの信仰が
保てるか考えるのは
間違いです。**

サレジオの聖フランシスコとアルスの司祭を扱ったドラマの第二部上演後、教皇様は教会に関する質問をお受けになった。

- 私は「鍵を手にした」教会や、摩天楼のようにそそり立ち、世界を見おろす教会を求めているわけではありません。私たちが共に築ける教会がほしいのです。教会には関心をそられます。私たちにとって、教会とは一つの選択、個人のふみ出す第一歩です。
- 若者の多くは教会から離れて行きますが、なぜなのでしょう。どうしていつも私たちには、教会の言うことがよく理解できないのでしょうか。

- 私の話に耳を傾けてくれる司祭を求めています。そういう司祭はめったに見つかりません。なぜでしょうか？
- 教会には私たちが必要なのです。けれども、本当にそうであるとは言おうとしません。
- 教皇様、教会についてお話しください。でも本に書いてあるような、あるいは立派な意見として



聞くような教会ではなく、日々の生活を生きる助けになるような、そんな教会について話してください。

（教皇様は、以下のようにお答えになった。）

あなたたちは選ばれた民族、王の司祭職、聖なる民であり、聞かす輝かしい光にあなたたちを呼ばれたお方の不思議を現わすために

選ばれた民である。(ペトロ①2・9) 親愛なるみなさん、これが聖ペトロの、洗礼を受けた人々——教会への呼びかけです。あなた方が「教会は私たちが必要としています。私たちがとって、教会とは一つの選択、個人のふみ出す第一歩です！」と言うのを聞いて、私はどんなに嬉しかったです。みなさんは教会の内側に身を置いておられます。教会がなくてもキリストへの信仰は保てるというのには妄説であることを、みなさんはご存じです。

それでも教会の欠点や不備を目前にはいられません。教会自体が自らの不完全に苦しんでいるかのようには見えません、特にみなさんの仲間が、教会が欠点だらけであることを理由に離れ去って行く時には、みなさんは、教会がいつも快く迎え入れてくれ、若さにあふれ、福音に忠実であるよう望んでいます。私もまた、このような教会に出会いたいと思っています。そのために神の恩寵と力をあわせて、絶え間なく働いているのです。聖パウロは言いました。「夫よ、キリストが教会を愛したように、あなたたちも妻を愛せよ。キリストが命を捨てられたのは、教会を聖と

するためにであり(…)汚点もしわもすべてそのようなものはない、輝かしく清く汚れない教会を御自分に差し出させるためであった。(エフェソ5・25-27)

事実、これこそ神の御計画の中で教会のあるべき姿であり、目に見えない現実の中での真の姿です。第二バチカン公会議は、教会の組織

について語る前に、まず教会の秘義について次のように述べました。聖霊が「教会の内に宿り、不断の若さとよみがえりを与え、配遇者と永遠に一致するよう導いている。」(『教会憲章』4番) これは永久に続く聖霊降臨と言ってもいいでしょう。

和解した罪人たち

もしわもない……とは言え、教会にはしわもあります。確かにしわはふんしわだらけです。今では教会はもはや青春時代ではありません。教会は母親です。それも二千年ものあいだ、歴史上の大変動や世の誘惑の数々に直面してきた母親なのです。長い間には、たびたびの迫害が新しい情熱を燃えあがらせるという経験も重ねましたが、教会のメンバーの中には、悪霊の誘いを受けた人々もいました。その人たちは富に慣れ、情性に陥り、あるいは世の救いのためにと思って対話するうち、誘惑に負けて世と妥協してしまうこともあったのです。イエズスは御父に祈りました。「私は彼らをこの世から取り去ってくださいと言うのではなく、悪から守ってくださいと願います。」(ヨハネ17・15)と。教会は自らを完全だと称する人々のクラブではなく、神と和解した罪人たち、キリストへと向かう道の途中にあり、人間としての弱さを抱えた人々の集まりなのです。

教会にとって大きな不幸だったのは、子供たちの分裂でした。一刻も早く、別れた兄弟たちと一致する道を探さねばなりません。サレジオの

説教・講話・書簡等の抄訳

聖フランシスコの模範にならって、福音という手段を——愛と、真理の探求という手段を用いましょう。真理への不忠実、これまた不幸と言へべきですから。

友

なるみなさん、このように教会は今も聖なものです。キリストは教会を聖なるものとしてお造りになったのですから。しかし、教会メンバーの具体的な聖性は、決して十分に表現することはできません。ちよと一軒のきあがった家を買った時のようなもので、いつもどこか建て増したり建て直したり、汚れを落としたりしなければならぬのです。しかも私たち自身が汚れているなら、どうして先人たちの罪を裁くことができましょうか。主の御前ではみな貧しく、みな罪人なのです。それでも教会は、私たちが洗礼を受けて以来ずっと、聖性のみなもとへと私たちを導いてくれるのです。教会は母です。私たちがはぐくみ、和解させてくれる母親です。自分の母親のことを、まるで見知らぬ者に対するかのように非難する人はいないでしょう。誰でも生命を与えてくれた人を愛するものですから。

聖人たちは、神秘に満ちた教会の聖性の、目に見える証人です。誰にも負けないほど人間的でありながら、その人間性はキリストの光に輝いていました。聖人たちが鼓舞する精神は、老化を知りません。教会が福者、聖者の列にあげた聖人たちもいます。が、全く人に知られない無名の聖人も大勢います。教会が凡庸に陥りそうになれば彼らが救い出し、その感化力によって内側から改革してくれ

ます。聖人たちは本来の目的地向かって教会を引っ張ってくださるので。教皇たちはアルスの司祭やシュバリエ神父のような神のしもべたちの前にひれ伏してきました。愛するみなさん、神は聖人たちを通してあなた方にしるしをお与えになります。みなさん自身もまた、聖性へと召されていくのです。

灯

台の明かりのように輝く聖人たちは共に、神の民全員も進んで行きます。みなさんの一人が次のように書いています。「聖書を根底に、キリストをいしずえに、福音を梁にした建設途中の家のよう、そんな教会がほしいと思います。」これはすばらしいイメージです。聖パウロは教会を神殿にたとえました。「あなたたちはキリストの体であって、各人はその一つの肢体である。(コリント①2・27) どの肢体もみな同じ働きをするわけではありません。それが、生きた体のおもしろいところです。

洗礼と堅信を受けた若いみなさん方は、すべてのキリスト教信徒の人と同様、基本となる細胞です。細胞なしには体はあり得ません。組織体は、置かれてあるさまざまな場に応じて区別が生じます。子供、若者、未婚、既婚、男女の別に応じて、従事する職業によって、隣人にどれだけ奉仕できるかによって、使徒職の役目や、時には共同体を生きつづけるために任せられた、叙階なしの聖務などに応じて。男女の間に本質的な違いはありません。聖職者の位階制の立場から言えば、使徒の後継者に

なれるのは男性だけですが、神から与えられた賜という点から見ると、女性も男性と同じく、教会に生命を与えています。そうです。教会はみなさん一人一人を心から信じています。神から与えられた内的生命は、くくみ育て、教会を助け、みなさんの友人たちの前で証人となってくださいであるう、と。

キ

リストの体に属する人々の中には、文字どおり全てを捨ててキリストに従うよう召されていることに気づく人々もいます。そこで修道生活に入った、奉獻生活を送るための団体に加わって、貞潔・清貧・従順のうちにとどまりつづけたるべき神の御国を人々に指し示すのです。それはすばらしい使命であると同時に、教会にとってもかけがえのないものです。それは、キリストへのあふれるような愛の結果と言うほかありません。婚約者に対するが如き愛です。このような召し出しを受け入れる人々は、幸いなるかな、「奉獻生活に召されているのではな

いかと思うと、こわいのです」と打ち明ける人も何人かありました。キリストが御自身の喜びと力とみなさんを満たしてくださることを、どうか信じてほしいと思います。

司

祭はキリストの神秘の中で特別な地位を占めています。司祭職に召されて教会から叙階を受ける限り、誰も司祭になることはできません。司祭の役割は、洗礼を受けた他の仲間たちとは異なります。

神秘体の頭であるキリストの御名によって、牧者として兄弟たちを集め、真の御ことばが伝わるよう配慮します。司祭は罪を赦し、兄弟たちを養うキリストの御体と御血を授け、皆を支え、助言する役目を果たします。「私の話を聞いてくれる司祭がほしいのです」とみなさんの一人が言われたので、たいへん嬉しく思いました。そう、司祭はみなさんのすぐそばにいます。キリストとの親密な一致の内に、福音のため身心を捧げ、万人に奉仕できるよう準備をととのえています。独身の誓いは、司祭にとつて不可欠なことです。(…)もちろん司祭はみなさんの話に耳を傾けるだけでなく、疑問に答えることもできます。何よりも、みなさんの弱さを認める神のお答えを与えることができるのです。これが神の救し、告

解の秘跡で与えられる赦しです。みなさんは、この赦しを求めするために司祭のもとへ行っていますか？ 神秘体の生命のために欠くべからざる司祭たちなのに、なぜこうも数少ないのでしょうか？ 愛するみなさん、私の方からお尋ねしたいのです。みなさんもその一人である若い信徒の間から、寛大かつ熱心に教会を築いてゆこうと願っているはずの信徒の間から、司祭職や修道生活への召し出しが見られないなどということがあり得るでしょうか？ 召し出しに気づく人はきつと大勢いるに違いない。なぜ尻こみしてしまっているのでしょうか。愛するみなさん、よく考えてみなければなりません。私は信じています。世界中多くの国で司祭職への新たな召し出しが増えつつあるのを、この目で見ておりますから。

科学と信仰とは、決して対立するものではありません。みなさんの前で今さら申し上げるまでもありません。第二バチカン公会議の『現代世界憲章』も教導職も、重ねてこれを確認している通りです。科学者と信仰者、そして敢て言うなら、外ならぬ信仰をもった科学者の経験は、現代のこの世界で、日ごとそのことを証明しています。科学と

目は人格をうつす鏡



①は第85号にあります。

信仰は、おのおの固有の目的と方法に従って人類に奉仕しているのです。いずれも人々の幸せのために。

今日、医学がとくに人間中心になっているという点に注目したいと思えます。そこには二つの危険があります。まず一つ目は、医学全体があまりにも専門化・細分化してきたという点です。これは当然なこと、医学が進歩しつつある証拠であって、眼

不変の教え

科学も例外ではありません。しかし、人間は霊と肉との複雑な合一体ですから、専門家は人間全体を見る努力を怠ってはならないのです。二つ目に、今日の医療体制について、往々にして患者との対一の結びつきを失いがちになっている点があげられます。医療が書類に基づいた、事務的でそっけないものになってしまっただけです。以前からもこの問題にふれてきました。みなさんに、合一体として人間を見るよう、また、あくまで人間中心の医療をすすめてくださるよう、お願いしてきた通りです。(一九八三年十月の世界医学会でのスピーチ等参照)

眼科医は、仕事の性質上、ある意味で有利な立場にあると言えます。何となれば、今私が述べた危険をすくなくし、人間の大切さを認めることができるからです。御承知のように、目は、言わば人格をうつす鏡、まことに身体の鏡であります。身体その他の器官や機能を侵す病氣も、目にあらわれるものです。また、人の思いや感情をあらわす目は、魂や精神の鏡でもあります。従って眼科医の方々には、純粹に人間学的な見地から、毎日の人とのつきあいの中で相手の目を見るときに何を意味するのか、よくおわかりになるでしょう。また、人間それ自体に目を向け、心の奥底にある心理的、精神的な姿を読み取り、人々との深く尊敬にみちた交わりを確立するにはどうすればよいかをも。

「目のいやし」は、さらに重大ないやし象徴に外なりません。福音書にはイエズスが盲人の目を開かれた話が数多く記されています。(マテオ9・27、12・22、15・30、21・14、マルコ8・22、ルカ7・21、18・42参照) イエズスのなさった奇跡はすべて、人間にもたらされた神の善、人間に注がれる神の愛、預言者が「盲人が見えるようになる」(マテオ11・5、ルカ7・22)と告げた、救い主の王国のかたどりで、どの奇跡にも霊的な重要性があり、いづれも信仰を得た人の全人格に及ぶ決定的な進歩の始まりとなるものでした。聖ヨハネが生まれつき盲人の治癒について詳しく書いているのも、目の治癒が明らかに心の治癒につながっていたからに外なりません。目が開くと同時に、信仰という光が与えられたのです。(ヨハネ9)

視力というかたどりをを用いて、キリストは完全な救いの秘義をあらわしてください。見る「力は、肉体のみならず、何よりも精神にかかわる問題です。キリストはしばしばファリサイ人たちの霊的盲目を非難して、見ても見ようとしな(マテオ13・13参照)とお叱りになりました。キリスト御自身は世の光(ヨハネ1・5参照)であり、「私に従う人はやみの中を歩かない」(ヨハネ8・12)と宣言なさっています。キリストを信じることは、その御言葉すなわち福音を信じることは、それまでとは異なった目で世界を見つめることです。神が御覧になると同じ仕方で見、新しく生まれ変わった世界に参入することなのです。一部の科学者

にとつては、このような固い信仰を持つのは困難に思えるようです。信仰や善い意志というものは、理性で得られる知識のみで手に入るものではありません。自力では得られない外からくる光を、喜んで受け入れる態度が必要です。信仰の前提となるのは、祈りによって与えられる神の恩寵です。それは聖霊のわざであり、教会もこれに一役買っています。

救いの使命

3 教会が引き継いだキリストの仕事は、あらゆる所へ救いを告げ知らせに行き、受け入れる心づもりのある人すべてに信仰の光を伝えることです。そして医者の方々が引き受けるべきキリストの業とは、目を癒し、光を取り戻させてやること。この意味で、眼科医の仕事は単なる博愛以上のものであります。独自のやり方で新しい世界の建設に寄与するわけですから。

キリストとともに、現世において心身両面のいやしから始まったこの新しい世界は、来たるべき世において、神の恩寵によって完全に実現される、と私たちは信じています。そして人々は自分が自由であること、欠けるところのない健康を得たことに気づき、すべての苦しみは消え去ることでしょう。そこでは、神の光に包まれているのではや太陽の光

聖心の改難の辱しめ

1 「辱しめに飽かされたるイエズスの聖心」(聖心の連禱より) 連禱の言葉はキリストの御受難の福音を繰り返すのに役立つ。心の目でもう一度眺めてみましょう。ゲッセマニでの捕われからアンナとカヤファの裁判、夜中の投獄、議会の夜明けの議決、ローマ総督の裁判、ガリラアのヘロデの刑、むち打ちの刑、茨の冠、十字架の道行、宣告、ゴルゴダに至る十字架の道行、恥辱の木にかけられ、苦しんだのちに口にされた「すべては成し遂げら

れた」に至るまでの出来事を。「辱しめに飽かされたるイエズスの聖心」。

2 人間すべての尊敬を熟知し、尊敬を熟知しておられるイエズスの聖心、神の御子の人としての心。全被造物の長子である御子の聖心。人間の霊魂と身体に固有な尊敬を熟知しておられる聖心。

「この尊敬を侮辱することすべてに對してまことに鋭敏な聖心。」

「辱しめに飽かされたる聖心。」

3 イザヤ預言者の言葉を思い出し、私に与えらばれたもの、彼は異國に公正を宣言する。彼は叫ばず、声を立てず、彼は折れたよしを折らず、よわいほのおの灯心を消さず。(42・1-3) 「彼の姿は人間として、あまりに変わりていて、もう人間のすがたではなかった、おおくの人が彼をみておどろいたように。(52・14) 「くるしみの人、くるしみになれた人。その前では顔をおおいたく、無視された人。(53・3)

4 「辱しめに飽かされたるイエズスの聖心」辱しめに飽かされたるイエズスの聖心。あなたも剣で貫かれるでしょう。(ルカ2・4-5)

「辱しめに飽かされたる聖心」(一九八六・八・二十四)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円 一年予約八〇〇円送料五〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393